

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：31201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593097

研究課題名(和文)介護者のQOLの実態把握と口腔ケアによるQOL向上の可能性の検討

研究課題名(英文) Analysis of the actual condition of caregivers' QOL and the possibility of QOL improvement by oral care

研究代表者

相澤 文恵 (Fumie, Aizawa)

岩手医科大学・歯学部・助教

研究者番号：80216754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：わが国において高齢者の介護を担う家族介護者と介護施設職員に対する質問紙調査を実施した。その結果、介護者のQOLは国民標準値より有意に低いことが確認された。また、介護負担感がQOLを低下させる要因であり、介護施設職員においては、職務満足度が高い者ほど介護負担感が低いことが認められた。さらに、口腔ケアへの意欲が高い者ほどQOL、セルフエスティームが高く、介護負担感が低いことが認められた。これらのことから、介護者が口腔ケアの意欲を持つことがQOL向上の要因となる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We carried out a questionnaire survey to family caregivers and nursing care staffs of the elderly in Japan. As a result, it was identified that QOL of caregivers was significantly lower than the Japanese standard value. Analysis revealed that the care burden was a factor that decreases their QOL, and the nursing care staffs with high job satisfaction had lighter care burden. In addition, caregivers with high willingness to oral care had higher QOL, higher self-esteem and lighter care burden was observed.

From these results, a possibility that willingness to oral care is the cause of improving QOL was suggested.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：歯学・社会系歯学

キーワード：高齢者介護 介護者のQOL 介護負担 職務満足度 セルフエスティーム 口腔関連QOL 口腔ケアへの意欲

1. 研究開始当初の背景

近年、わが国の高齢者人口は急速に増加し、それに伴って、要介護高齢者の数も増加の一途をたどっている。厚生労働省によると2025年には要介護高齢者が520万人を超えると推計されている。今日の日本の高齢者福祉政策の中軸は介護保険制度であり、その目的はケアが必要な高齢者の自立と尊厳をサポートすることである。高齢者の尊厳を考える時、介護者との関係を抜きにしては論じられない。ケアは介護される人間と介護する人間との相互行為であるから、双方のQOLが保たれることが重要である。要介護高齢者の在宅介護において家族介護者の果たす役割は大きく、その負担の大きさが介護者のQOLを低下させているという報告がある。

介護保険創設の目的の1つに家族介護者の介護負担の軽減が挙げられている。これは、家族介護者のQOLの低下を防ぎ、要介護者を含めたより良い家族生活の実現を保障することにもつながっている。その実現のためには、介護において家族と社会がそれぞれの役割と機能を分担し、責任を持ち続けることが必要である。在宅要介護高齢者が安定した生活を継続させるには、要介護者への支援サービスばかりではなく、家族介護者の介護負担の軽減やQOLの向上にも配慮した支援サービスが望まれる。

一方、高齢者福祉施設への入所を希望する本人・家族は多く、入所待機者が急増している。現在、高齢者介護施設において疲労や精神的ストレスの多さから施設職員のQOLが損なわれていることが報告されている。また、介護職の離職率は他職種と比較して高い。介護の担い手不足によって介護者の負担感がさらに高まり、それが要介護高齢者への対応におよび、結果として、要介護高齢者のQOLの低下にもつながりかねない状況にある。

2025年にはいわゆる「団塊世代」が75歳、後期高齢者となることから、専門職としての介護職の需要が拡大することが予想される。介護職の人材を確保するためには、待遇改善とともに、介護職の専門性を向上し、介護職員が職務満足感をもって上質な介護を提供できるように支援する方法の検討が必要とkanngaeru。

2. 研究の目的

我々は、要介護高齢者のQOLを維持・向上するためには、介護する側のQOLを高める必要があるという前提のもとに、「介護者が自らの口腔内に対する関心を持ち、ケアすることがセルフエスティームを高め、それによってQOLが向上する」という仮説を設定した(図1)。また、これまでの調査は特定地域、あるいは特定施設を対象としたものが多く、その結果を一般化することは困難であると考えられた。このようなことから、我々は統計学的に有意なサンプリング方法を用

いて調査し、その結果を行動学的観点から分析することとした。

研究の第一段階では「家族介護者と介護施設職員のQOLの実態把握」、「QOLと介護負担感、セルフエスティーム、職務満足度の関連性の確認」をし、第二段階で、「口腔ケアへの意欲をもつことによって、介護者のQOLが向上する可能性」を検討することを目的とした。

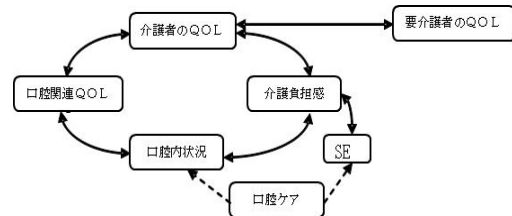


図1 研究仮説のフローチャート

3. 研究の方法

本調査は対象者に対する倫理的配慮に万全を期するように企画し、岩手医科大学歯学部倫理委員会の審査・承認を得た後に、調査を開始した。調査データの分析にはIBM SPSS Statistics 19.0を用いた。

(1) 家族介護者を対象とした調査

平成23年9月15日から平成23年12月15日、家族介護者を対象とした質問紙調査を実施した。

質問項目は、要介護者および主たる介護者の基本情報(性、年齢、要介護度、家族構成)、疾病の有無、家庭での介護状況、利用している介護サービス、主たる介護者の生活環境、日常生活状況、介護者のQOL、介護負担感、セルフエスティーム等とした。介護者の包括的健康関連QOLはSF-8、口腔関連QOLはGOHAI、介護負担感は多次元介護負担尺度(BIC-11)、セルフエスティームはRosenbergのセルフエスティーム尺度を用いてそれぞれ評価した。

質問紙送付数は分析方法を考慮し、許容誤差率5%、回収率60%で決定し、6,242通とした。質問紙は返信用封筒と共に岩手県内の全居宅介護支援事業所、地域包括支援センター宛(417カ所)に発送し、要介護度別に各2名の介護者を無作為に抽出し、配布するよう依頼した。質問紙はケア・マネージャーが介護計画策定時に調査説明書とともに介護者に配布し、次回訪問時に回収用封筒に封をした状態で回収した。

(2) 介護施設職員を対象とした調査

平成24年8月1日から11月30日、岩手県内の老人介護施設職員を対象として「介護施設職員の健康とQOLに関するアンケート」調査を実施した。調査に先立ち岩手県社会福祉協議会高齢者福祉協議会、岩手県認知症高齢者グループホーム協会役員会、岩手県介護老人保健施設協会に対して調査の趣旨を説明し、高齢者介護施設への質問紙調査実施の同意を得たのち、岩手県内の全老人介護施設

(介護老人保健施設、介護老人福祉施設、グループホーム、特定施設、介護療養型医療施設)に対して調査への協力を依頼し、承諾が得られた施設に質問紙を送付した。

質問項目は、職種・経験年数、勤務時間、夜勤日数、健康状態、健康習慣、生活環境・日常生活状況、入所者の口腔ケアに対する考え、職務満足度、介護負担感、QOL、セルフエスティーム、等とした。介護施設職員の包括的健康関連 QOL は SF-8、口腔関連 QOL は GOHAI、職務満足度は介護職を対象とした堀田の職務満足度尺度、介護負担感 は Maslach と Jackson のバーンアウト尺度、セルフエスティームは Rosenberg のセルフエスティーム尺度を用いてそれぞれ評価した。

(3)家族介護者、介護施設職員から得た自由回答の分析

家族介護者および介護施設職員から得た質問紙に記載された自由回答をデジタルデータ化し、Text Analytics for Surveys Japanese 4.0 を用いて、テキストマイニングによる形態素分析で頻出語を抽出し、QOL、介護負担感、セルフエスティームとの関連を分析した。

(4)家族介護者の居住地と QOL、介護負担感、セルフエスティームの関連

回答者を居住地から、東日本大震災による津波に被災した沿岸(571名)と内陸(1,783名)の2群に分類し、介護者の居住地と QOL、介護負担感、セルフエスティームの関連を分析した。

4. 研究成果

(1)家族介護者を対象とした調査

対象者

質問紙を送付した 417 施設のうち 237 施設から回答を得た(回収率:56.8%)。回答施設は岩手県内の全市町村(33市町村)に分布していた。回収した質問紙は 2,358 通(男性:437名、女性:1,903名、未記入:27名)であり、必要サンプル数をほぼ満たした。

介護者の平均年齢は 62.91 歳 ± 11.07 歳(男性:66.7 ± 12.5 歳、女性:62.0 ± 10.5 歳)であった。要介護者との続柄で最も多かったのは「嫁」の 712 名、ついで「娘」の 551 名、「妻」の 461 名の順であった。家族形態は 2 世代以上同居世帯が 1,818 名で最も多く、夫婦のみの世帯が 522 名、ケアハウス等で独居している者が 14 名であった。対象者が介護している家族の要介護度は、要支援 1:228 名、要支援 2:266 名であり、要介護度 1 から 5 までは、それぞれ、370 名、444 名、367 名、321 名、322 名であった。

対象者のうち介護サービスを全く利用していない者は 192 名で、1 種類利用している者が 1,389 人と最も多かった。利用が最も多かったのはデイサービス、ついで、ショートステイ、訪問ヘルプ、訪問入浴の順であった。

家族介護者の QOL、介護負担感、セルフエスティームの状況

介護者の SF-8 の身体的サマリスコア

(PCS)、精神的サマリスコア(MCS)の平均値はそれぞれ、45.92 ± 7.4、46.61 ± 7.3、口腔関連 QOL (GOHAI) の平均値は 52.6 ± 7.8 であった。70 歳代以下の対象者 2,128 名のデータを抽出し、国民標準値と比較した結果、PCS、MCS、GOHAI の平均値はともに国民基準値より有意に低いことが認められた ($p < 0.01$)。

また、対象者の介護負担感(BIC-11)の平均値は 15.98 ± 7.9(男性:13.93 ± 7.99、女性:16.46 ± 7.83)で、女性において有意に高かった ($p < 0.01$)。また、セルフエスティームの平均値は、32.97 ± 5.7(男性:33.77 ± 5.51、女性:32.78 ± 5.73)で、男性の得点が高かった ($p < 0.01$)。

介護負担感に関わる要因

介護負担感と各指標の関連を検討した。GOHAI 得点が正規分布を示さなかったため、関連性の分析には Spearman の順位相関係数を用いた。その結果、介護負担感(BIC-11)と最も強い関連を示したのは MCS であり($r = -0.567$)であり、PCS、GOHAI、セルフエスティーム(SES)とも負の相関を示し、介護負担感が高いほど QOL、セルフエスティームが低いことが認められた。また、セルフエスティームは MCS、PCS、GOHAI と正相関を示し、自分自身を大切な存在であると認識することと QOL の関連性が認められた(図 2)。

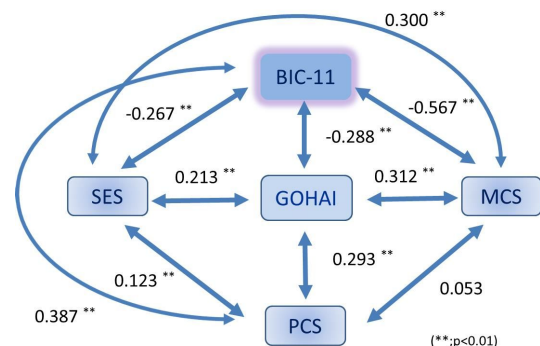


図 2 介護負担感、QOL、セルフエスティームの関連

介護負担感を目的変数とした重回帰分析

介護負担感に関わる要因を総合的に検討するため、BIC-11 を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。説明変数は要介護者および介護者に関する基本情報、生活環境、介護期間、介護サービスの利用状況、セルフエスティーム、GOHAI、ソーシャルサポート等に関する項目とした。GOHAI 得点は正規分布しないことから、中央値を基にして 2 分類し、ダミー変数として分析に供した。また、介護負担感には性差が認められたことから、性別による重み付けを行って分析したところ、表 2 に示した 7 項目が有意な項目として選択された ($R = 0.565$ 、自由度調整済み $R^2 = 0.369$)。選択された項目には多重共線性は認められなかった。

口腔関連 QOL が高い、セルフエスティームが高いことや、家族や友人との関係満足度

が高い、友人や身内との交流頻度満足度が高いなど、ソーシャルサポートが充実していることは介護負担感を軽減し、介護者に治療中の疾患があること、要介護者の口臭が強いこと、要介護度が高いことは介護負担感を高くする要因であることが認められた。

表2 介護負担感に関わる要因

	非標準化係数		標準化係数		t 値	有意確率
	β	標準誤差	β			
(定数)	26.623	3.028			8.791	.000
要介護度	1.143	.201	.267		5.696	.000
身内や友人との関係満足度	-1.067	.560	-.118		-1.906	.058
セルフエスティーム	-.273	.074	-.186		-3.675	.000
介護者の治療中の病氣(逆転)	2.369	.778	.142		3.046	.003
口臭強度(逆転)	1.001	.361	.128		2.771	.006
身内や友人との交流頻度満足度	-1.403	.520	-.161		-2.695	.007
GOHAI	-1.234	.509	-.117		-2.423	.016

口腔ケアへの意欲と QOL、介護負担感、セルフエスティームの関連

口腔ケアへの意欲のアウトカムとして、歯科の定期受診と歯磨きの回数を用い、介護者の QOL、介護負担感との関連を検討した。歯科の定期受診者のセルフエスティームは高かったが ($p<0.01$)、PCS、MCS、介護負担感には有意な差は認められなかった。また、GOHAI は受診者で高かったが、有意差は認められなかった。歯磨き回数に関しては、MCS には有意な差は認められなかったが、1日3回以上磨く者のセルフエスティーム、PCS は高く ($p<0.01$)、介護負担感は低く、GOHAI 高得点者の割合は高かった ($p<0.05$)。

(2)介護施設職員を対象とした調査

回答者

岩手県内の 189 施設 4,809 名 (平均年齢; 39.32 ± 12.2 歳) の職員から回答を得た。対象者の 37.5% (1,801 名) が介護老人福祉施設に勤務し、介護老人保健施設には 34.6% (1,666 名)、グループホームには 17.9% (861 名) が勤務していた (表 3)。就業形態別では、常勤の正職員: 3,183 名、フルタイムの臨時職員: 1,110 名が全体の 90% を占めていた。対象者の 1 か月あたりの実労働時間の平均は 152.7 時間、夜勤日数は 3.5 日であった。

表3 対象者の年齢別職種(年齢記載者のみ)

	年 代					合計
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	
医師	0	0	0	0	2	2
生活相談員	25	47	26	20	1	119
介護支援専門員	11	77	57	74	18	237
介護福祉士	771	708	343	260	43	2,125
看護師	16	68	117	149	28	378
准看護師	15	36	41	92	32	216
ヘルパー	142	166	187	160	46	701
管理栄養士	13	17	7	3	1	41
栄養士	13	9	3	2	1	28
理学療法士	23	19	12	3	0	57
作業療法士	24	31	15	2	0	72
事務職員	19	53	34	33	12	151
歯科衛生士	0	0	2	0	0	2
その他	132	105	125	119	54	535
未記入	23	13	9	22	10	77
合 計	1,227	1,349	978	939	248	4,741

ついで、腰痛: 584 名、肩こり: 410 名の順であった。

施設職員の QOL、職務満足度、介護負担感、セルフエスティームの状況

介護施設職員の QOL を評価したところ、精神的サマリスコア、身体的サマリスコア、GOHAI スコアはそれぞれ、 43.57 ± 8.1 、 46.64 ± 7.6 、 52.77 ± 7.2 であり、すべて国民標準値より有意に低かった。

ついで、対象者の QOL、職務満足度、セルフエスティーム、介護負担感を勤務施設ごとに比較したところ、MSC、セルフエスティームには勤務施設による有意差は認められなかった。一方、PCS、職務満足度、個人的達成感、GOHAI、情緒的消耗感、脱人格化には施設による差が認められ ($p<0.01$)、PCS、職務満足度、個人的達成感グループホームで、GOHAI は特定施設で最も高かった。また、情緒的消耗感、脱人格化は介護療養型医療施設で最も高かった (表 4)。

表4 勤務施設別にみた介護施設職員の QOL、職務満足度、セルフエスティーム、介護負担感の状況

	人 数	PCS	MCS	GOHAI	職務満足度
介護老人福祉施設	1,947	46.76	43.70	52.87	5.86
介護老人保健施設	1,666	46.29	43.61	52.82	4.52
グループホーム	861	47.24	43.34	52.50	6.70
特定施設	112	46.21	44.53	53.32	6.10
療養型施設	223	46.04	42.64	52.19	4.93
合 計	4,809	46.64	43.57	52.77	5.53

	人 数	セルフエスティーム	情緒的消耗感	脱人格化	個人的達成感
介護老人福祉施設	1,947	28.70	15.76	11.54	13.01
介護老人保健施設	1,666	29.15	15.78	12.06	12.66
グループホーム	861	29.17	14.74	11.04	13.45
特定施設	112	29.55	14.64	11.08	13.02
療養型施設	223	29.10	16.35	12.28	13.10
合 計	4,809	28.98	15.58	11.65	12.97

介護施設職員の QOL、セルフエスティーム、介護負担感、職務満足度の関連性

介護施設職員の QOL、セルフエスティーム、介護負担感、職務満足度の関連を Spearman の順位相関係数を用いて分析し、1%水準で有意性が認められた項目間の相関係数を図 3 に示した。職務満足度は個人的達成感と強い正の関連を示し、SF-8 の MSC、セルフエスティームとも正の相関を示した。職務満足度が高い職員ほど介護負担感が低く、QOL、セルフエスティームが高いことが認められた。また、脱人格化、情緒的消耗感とは負の相関を示し、職務満足度が高い者ほど介護負担感が低い傾向にあることが示された。また、口腔関連 QOL が高いほど全身の QOL が高く、介護負担感が低いことが示された。

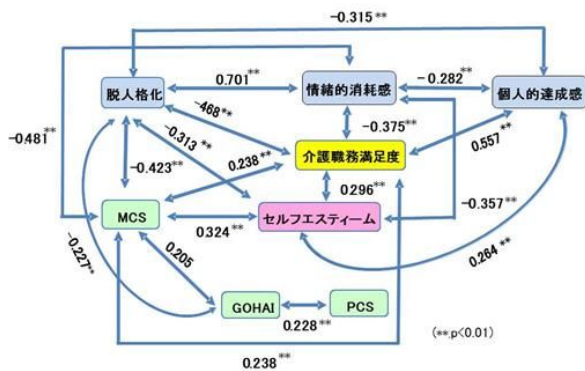


図3 介護施設職員のQOL、セルフエスティーム、介護負担感、職務満足度の関連性

施設職員の介護職継続意欲に関わる要因

対象者が介護職を継続する意欲は、「出来るだけ続けたい：1,675名、しばらく続けたい：1,269名、わからない：622名、機会があれば他の仕事に変わりたい：727名、ぜひ他の仕事に変わりたい：149名」であり、61.2%に介護職継続の意欲があった。介護職継続意欲と介護負担感、職務満足度の関連を Pearson の相関係数を用いて分析したところ、職務満足度とは正の相関 ($r=0.432$)、介護負担感とは負の相関 (情緒的消耗： $r=-0.469$ 、脱人格化： $r=-0.483$ 、個人的達成感： $r=0.412$)を示し、介護負担感が高いほど介護職を継続する意欲が低いことが認められた。介護職継続意欲の有無によって対象者を2分(有：2,934名、無：1,498名)し、就業形態による差を分析した。その結果、継続意欲が有る者の割合は、常勤の正職員で63.8%、フルタイムの臨時職員で70.3%、その他72.5%であり、就業形態間で有意な差が認められた ($p<0.01$)。ついで、継続意欲の有無とQOL、セルフエスティームとの関わりを検討したところ、意欲のある者はPCS、MCS、セルフエスティームが高かった ($p<0.01$)。

職務満足度を目的変数とした重回帰分析

介護職を継続する意欲は職務満足度と関わることが報告されている。職務満足度に関わる要因を総合的に検討するため、堀田の職務満足度尺度を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。説明変数は介護施設職員に関する基本情報、勤務時間、夜勤日数、勤務施設等の環境要因、生活習慣、セルフエスティーム、GOHAI、ソーシャルサポート、健康観、入所者の口腔ケアに関する意識等に関する項目とした。GOHAI得点は正規分布しないことから、中央値を基にして2分類し、ダミー変数として分析に供した。また、職務満足度には就業形態による差が認められたことから、就業形態による重み付けを行って分析した。その結果、表5に示す12項目が選択された($R=0.715$ 、自由度調整済み $R^2=0.505$)。選択された項目には多重共線性は認められなかった。

職務満足度と最も強い関わりを示したの個人的達成感であり、次が脱人格化であった。

個人的達成感や研究会・研修会への参加意欲、専門職としてのレベルの自己評価が高い、自分の健康状態への関心が高い、ソーシャルサポートがある、入所者への口腔ケアの重要性を高く評価していることは職務満足度と正の関連あり、脱人格化が進み、入所者の口腔の手入れが難しいと感じていることは職務満足度と負の関連を有すると認められた。

表5 職務満足度に関わる要因

	非標準化係数		標準化係数		t	有意確率
	β	標準誤差	β			
(定数)	-16.748	1.838			-9.111	.000
個人的達成感	.614	.050	.318		12.358	.000
脱人格化	-.472	.039	-.302		-12.179	.000
研究会への参加意欲	.971	.169	.141		5.741	.000
家族や友人との会話満足度	.817	.154	.128		5.308	.000
専門職としてのレベル	1.104	.203	.131		5.441	.000
入所者の口腔ケアは大切	1.046	.260	.099		4.021	.000
健康状態への関心	.631	.192	.079		3.283	.001
勤続年数	.081	.022	.087		3.628	.000
親しい友人の数	.402	.150	.063		2.673	.008
歯みがきが気持ちがいい	.501	.206	.060		2.433	.015
自由回答の記述の有無	.728	.335	.051		2.171	.030
入所者の口腔ケアは難しい	-.322	.155	-.048		-2.070	.039

口腔ケアへの意欲とQOL、介護負担感、セルフエスティームの関連

口腔ケアへの意欲のアウトカムとして歯科の定期受診と歯ブラシ以外の清掃用具の使用を用い、介護者のQOL、介護負担感との関連を検討した。歯科の定期受診者の職務満足度、セルフエスティーム、個人的達成感が高く、情緒的消耗感、脱人格化は低かった ($p<0.01$)。また、MCSは高く ($p<0.05$)、GOHAIは低かった ($p<0.05$)、PCSには有意差は認められなかった。歯ブラシ以外の清掃用具の使用者の職務満足度、セルフエスティーム、個人的達成感が高く ($p<0.01$)、情緒的消耗、脱人格化は低かった ($p<0.05$, $p<0.01$)。MCS、PCSには有意差が認められず、GOHAIは使用者で低かった ($p<0.05$)。

(3) 家族介護者、介護施設職員の自由回答に関する分析

家族介護者調査からは、「困っている、介護、イライラ、ストレス、不安、心配、大変」等の不安に関する語が抽出された。自由回答記載者の介護負担感是非記載者より高く ($p<0.01$)、PCS、MCS、GOHAIは低かった ($p<0.01$)。施設職員調査からは、「社会的、身体的、精神的、仕事量、待遇、介護職、給料が安い、やりがい」等の職務遂行に関わる語が頻出語として抽出された。自由回答記載者のセルフエスティーム、個人的達成感是非記載者より高かったが ($p<0.05$)、PCS、MCS、GOHAIは低かった ($p<0.01$)。また、介護負担感(脱人格化、情緒的消耗)は高かった ($p<0.01$)。職務満足度は記載者で高かったが、有意な差は認められなかった。

(4) 家族介護者の居住地とQOL、介護負担感、セルフエスティームの関連

家族介護者を対象とした調査から得られたデータは岩手県内全市町村を網羅していた。回答者を居住地域から東日本大震災によ

る津波に被災した沿岸(571名)と内陸(1,783名)との2群に分類し、性差、年齢差がないことを確認した後、両群における介護負担感、QOL、セルフエスティームの差を分析した。その結果、介護負担感、MCS、GOHAIには有意差は認められなかった。一方、PCS、セルフエスティームは沿岸で有意に低かった($p<0.01$ 、 $p<0.05$)。

(5)研究の総括

本研究の結果から、家族介護者、介護施設職員のQOLが国民標準値より低いこと、介護負担感が重いほどQOLが低いことが確認された。また、介護施設職員においては職務満足度が高いほど介護負担感が低いことが示され、職務満足度は達成感やソーシャルサポートによって高まることが確認された。

また、介護負担感を軽減する要因としてソーシャルサポートなどとともに口腔関連QOLが抽出された。また、口腔関連QOLはセルフエスティームと関連性を示した。本調査の結果、歯磨き回数が多い者、歯ブラシ以外の用具を使用している者の口腔関連QOLは有意に高かったが、定期的歯科受診の有無による有意差は認められなかった。このことから、口腔関連QOL向上のためにはプロフェッショナルケアとセルフケアの双方が重要であることが確認された。一方、要介護者の口臭が強さが介護負担感を重くする可能性が示された。本研究では要介護者の口臭の測定は実施しなかったため、口臭強度の評価は介護者の主観による。しかしながら、介護者の評価は重視すべきであり、要介護者に対する口腔ケアの重要性が示唆されたものと考えられる。在宅介護においては介護保険制度における居宅サービスの1つであるヘルパーによる口腔ケアの利用や、歯科医師、歯科衛生士による訪問歯科診療の活用が家族介護者の介護負担の軽減のために必要な方策のひとつであると考えられた。また、介護施設においては、職務満足度を向上させる方策の一つとして、口腔ケアの研修を充実させ、施設職員が口腔ケアに負担を感じない環境づくりをすることも有効であると考えられた。

さらに、口腔関連QOLとセルフエスティームの関連性が示されたことから、自身の口腔をケアすることが、口腔関連QOLを高めるのみならず、自分自身を大切な存在として認識し、セルフエスティームを高め、結果としてQOLが高まる可能性が確認された。

これまで、介護者のQOLに関する調査研究は、家族介護者、介護施設職員のいずれか一方を対象として行われてきた。我々が要介護高齢者の介護にかかわる問題はその担い手である家族と介護施設職員の双方について検討する必要があると考え調査を実施し、QOLに関わる要因を比較検討したこと、また、国際比較が可能なQOL指標を用いた分析結果を国際学会において発表し、多くの研究者から高い評価を得たことは、本研究の大きな成果であったと考える。さらに、介護の現場

において家族介護者、介護職員がどのようなセルフエスティームの状態であるかを確認したことは、介護者のQOLを考えるうえで意義があったと考えられる。人はセルフエスティームが高い状態にあるとき、物事を前向きにとらえ、社会の中における自分の役割を最大限に果たすことができる。また、相手の立場を理解した上で尊重し、行動することができる。したがって、セルフエスティームを高く保つことは、介護者のQOLを考える上で重要な要因であると考えられた。

以上のことから、介護負担感の軽減のためにはソーシャルサポートが必要であることが再確認され、同時に我々の仮説「介護者が自らの口腔内に対する関心を持ち、ケアすることがセルフエスティームを高め、それによってQOLが向上する可能性」が検証された。

今後の課題は自由回答の分析を進め、介護の現場で家族介護者、施設職員が何を求め、何を考えているかを確認し、それに対する答えを出すための資料を完成することである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

相澤文恵, 家族介護者における介護負担感と口腔関連QOLの関連性, 第40回日本保健医療社会学会大会, 2014年5月18日, 仙台.

相澤文恵, 高齢者介護施設職員のQOLの状況, 第72回日本公衆衛生学会総会, 2013年10月23日, 津.

Fumie Aizawa, Oral Health-related QOL of Family Caregivers of the Elderly, The 2nd Meeting of the International Association of Dental Research -Asia Pacific Region, August. 22, 2013, Bangkok.

相澤文恵, 要介護高齢者の家族介護者のQOLに関わる要因, 第71回日本公衆衛生学会総会, 2012年10月23日, 山口.

6. 研究組織

(1)研究代表者

相澤 文恵 (AIZAWA FUMIE)

岩手医科大学・歯学部・助教

研究者番号: 80216754

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

岸 光男 (KISHI MITSUO)

岩手医科大学・歯学部・准教授

研究者番号: 60295988

阿部 晶子 (ABE AKIKO)

岩手医科大学・歯学部・講師

研究者番号: 90185992

南 健太郎 (MINAMI KENTARO)

岩手医科大学・歯学部・助教

研究者番号: 10364374